## Q2－1　学校生活になじめない様子が見られます。どのような配慮が必要ですか。

**A**　帰国・外国人児童生徒の学校生活への不適応の背景には、言葉や習慣の違いによるものが考えられます。まずは、児童生徒にとって「居場所」が確保されることが重要です。自分が受け入れられているという安心感をもてるようにしましょう。

### 友達と一緒に学校生活を楽しむことができるようにしましょう。

・学級の児童生徒に積極的に声かけをして、お互いのコミュニケーションが生まれるようにする。
・休み時間に一緒に遊んだり、登下校をしたりする友達を見つけることができるよう､仲間づくりのきっかけをつくる。
・学級の児童生徒に、異なる文化をもつ帰国・外国人児童生徒とのよりよいコミュニケーションの取り方について考える機会をもたせ､違いを受け入れられる学級の風土づくりやよりよい人間関係づくりを進める。

不安でいっぱいで、慣れるのに時間のかかる子どももいるので、様子を見ながら、場合によってはあまり無理に働きかけ過ぎないという配慮も考えられます。

### 自己のよさに気付くことができるようにしましょう。

・帰国・外国人児童生徒がそれまで生活していた国の文化や言葉などを紹介する機会を積極的に設ける。
・学校や教職員、周りの児童生徒や保護者、さらには地域社会が帰国・外国人児童生徒のことを理解し、自分の言語や文化に誇りをもって過ごすことができるようにする。

帰国・外国人児童生徒がそれまで生活していた国での体験を語り、それが本人にとってプラスに働くためには、
●クラスの児童生徒が肯定的に受け止める素地をもっていること。
●帰国・外国人児童生徒が「他の子と異なる」ことをきちんと受け止められること。
が必要です。
学級担任等が、その子どものそれまで生活していた国を「素晴らしい国」として紹介するなどの働きかけから始めるとよいでしょう。

### 不適応症状には丁寧に対応しましょう。

・頭痛を訴える、乱暴な態度になる、黙り込む、怒りっぽくなるなど、異文化への不適応症状を起こしていることが考えられる場合は、じっくり話を聞いたり、よく観察したりする。
・保護者やスクールカウンセラー、通訳等との連携を図り、早急に対応する。

## Q2－2　日本の学校のきまりを理解していない場合は、どのように対応をすればよいですか。

**A**　まずは学校のきまりについて、帰国・外国人児童生徒及び保護者にその意義を含め十分に説明する必要があります。

指導に当たっては、文化の違いによるものには柔軟な対応が大切ですが、まずは日本の学校のきまりを丁寧に説明し、理解や協力を得ることが大切です。

言葉が通じないからといって曖昧にしてしまうことは、勘違いや誤解の基となるとともに、学級の他の児童生徒に教師への不信感を抱かせる結果になります。

### 【道内の実践】

**アメ・ガムの指導**

保護者と一緒に初登校の時、校長室で子どもがガムをかんでいたので、その場で学校のきまりを説明したところ、親子ともに理解し、その後の学校生活でアメやガムを食べることはありませんでした。

最初に見逃すと、途中での指導は難しいので、はじめの指導が大切です。

### コラム　ピアスなどアクセサリーやよく聞く「問題行動」

**東京学芸大学准教授　菅原　雅枝**

日本の多くの教員は日本の学校文化の中で育ってきました。一方、外国人児童生徒やその保護者は異なる文化で育っています。人は自分にとって最も身近な文化習慣を「当たり前」「常識」と認識します。そして、それと異なる対応をする人がいると「ヘンだ」「（相手が）おかしい」と感じてしまいます。外国人児童生徒の「問題行動」として、「学校行事に参加しない」、「『ごめんなさい』を言わない」、「掃除をしない」などがよく聞かれますが、彼らの育った文化では日本とは異なる意味付けをしている可能性があります。それらは彼らの社会では「問題行動」ではなかったのです。

その例として、日本の多くの学校で禁止されているピアスなどのアクセサリーの問題があります。服装に関する規定が日本とは異なる国（学校）もありますが、民族的・宗教的なシンボルとして付けている場合もあります。一概に「学校生活に不要なもの」として扱うことはできません。こうした視点をもって保護者や本人にしっかり確認することは、お互いの文化を尊重してよい関係をつくることにつながります。

例えば、保護者に対して、

① 「日本ではこう、あなたの国の学校では？」と問いかける。
② 「違いますね」と共感する。
③ 何が一番子どものためになるかという視点から、学校側の危惧（けが・日本人児童生徒の感じ方）を具体的に伝え、保護者とともに対応を考える。

などの対応が考えられます。

もちろん話合いの結果、これまでの学校の方針に変更が求められる場合もありますが、その際は全校、全学級で柔軟に対応することが大切です。

## Q2－3　いじめを受けていると言って学校に行きたがらない場合、どのような対応をすればよいですか。

**A**　帰国・外国人児童生徒などがいじめを受けていると言っている場合にも、他の児童生徒への対応と同様に、各学校のいじめ防止基本方針に基づき、迅速に対応する必要があります。

とりわけ、帰国・外国人児童生徒にかかわっては、全校及び保護者や地域と連携して取り組む体制を整えるとともに、いじめられている児童生徒が自尊感情をもつことができる取組や、いじめる児童生徒の帰国・外国人児童生徒への見方や考え方を変えるための取組を進める必要があります。

### 児童生徒理解や全体で支援する体制整備に努めましょう。

・いじめの実態やその対策について、早急に全教職員で話し合い、全校で取り組む体制をつくる。また、地域やＰＴＡと連携して取組を進める。
・帰国・外国人児童生徒に関わる教師がその児童生徒の国に興味・関心をもち、学級・学年の中で帰国・外国人児童生徒が自尊感情をもち、これまで生活してきた国の文化を誇りに思えるような取組を行う。
・帰国・外国人児童生徒を取り巻く児童生徒の外国や異文化に対する見方や感じ方、考え方を変えていく取組を行う。

国や文化によって「いじめ」の解釈が異なる可能性もあるため、「いじめ」の有無の前に、実際にどのようなことが起きていたのかを客観的に調査し、それを保護者に明確に伝えるところから始めましょう。

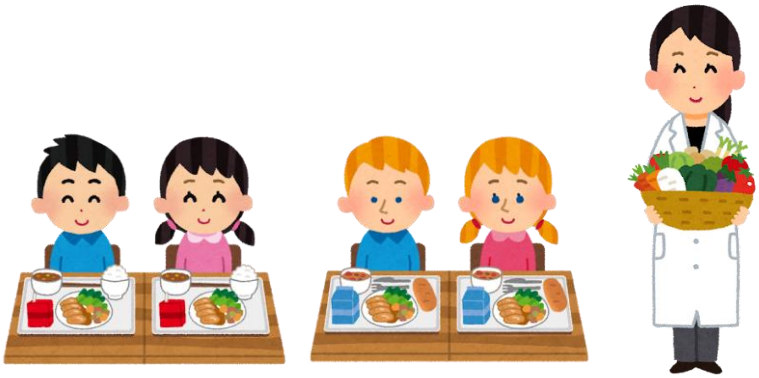
ただし、国によって身体接触の受け取り方には差があります。日本では問題ないとされる程度の「ふざけあい」や励ますつもりで肩をたたく行為が、異なる文化では極めて失礼なことや許されないことになることもあります。文化や習慣によるとらえ方の違いで子どもを傷つけた場合は、率直に伝えて謝罪できるようにしたいものです。

## Q2－4　給食が食べられない時は、どのような対応をすればよいですか。

**A**　帰国・外国人児童生徒の中には、宗教上の理由で食べられるものに制限があるなど、学校給食が食べられない場合や、文化の違いによって食事のマナーが異なったりすることもあります。そのため、児童生徒の状況を把握し、保護者との連携の下、適切に対応する必要があります。

### 子どもと保護者に伝わりやすい工夫をしましょう。

- 毎月の献立表をチェックし、食べられないものにチェックを入れることができるプリントを家庭用と学級用に作る。
- 家庭用は本人に渡し、保護者にチェックしてもらう。
- 教室用は、本人にも給食当番にもわかるところに掲示する。
- 周りの児童生徒に、文化や習慣の違いを正しく理解できるよう説明する。



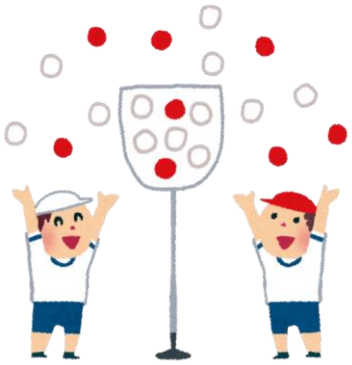
## Q2－5　水泳の授業や日曜日の登校などで配慮することは何ですか。

**A**　帰国・外国人児童生徒の多様性の背景は、生活していた国や宗教の違いなどによるところが大きく、この多様性を尊重することが重要です。国によって学習する教科やその内容、行事等が大きく違う場合があります。

水泳や運動会など母国にはなかった行事に参加したり、土・日曜日に登校したりできるよう、保護者が十分に理解できるまで説明しましょう。

### 保護者の理解が十分でないため、学校行事に参加しない場合は…

・行事の趣旨や日程、必要なものなどについて何度も丁寧に説明する。
・保護者に教育課程について説明し、理解を促す。

### それまで生活していた国では行っていなかったため、水泳の参加に躊躇している場合は…

・水泳に不安を感じている児童生徒については、クラスのみんなが楽しそうに水遊びをしている様子を見学させるなどして、水に対する抵抗感をなくしていく。
・必要な用具について、保護者に実物を見せて説明する。
・経済状況が厳しいことも考えられるため、教職員や保護者に呼びかけて用具を準備する。
・宗教上の理由で肌を露出することができない帰国・外国人児童生徒については、服装等について柔軟に対応する。